

令和 6 年 5 月 29 日現在

機関番号：32601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2023

課題番号：19K23082

研究課題名（和文）植民地朝鮮・台湾・満州における文楽（義太夫）享受の諸相に関する調査・研究

研究課題名（英文）A study of various aspects of the enjoyment of Bunraku (gidayu) in colonial Korea, Taiwan, and Manchuria

研究代表者

韓 京子（Han, Kyoungja）

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：30844774

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、植民地朝鮮・台湾・満州における文楽（義太夫）享受の諸相について、外地における日本伝統芸能の公演や外地に住む内地人の娯楽としての芸能活動という観点から考察したものである。主に外地で発行された新聞や雑誌記事、日本国内で刊行された文楽および演劇関連雑誌記事をもとに、外地における古典芸能興行や内地人の素義会の活動の実態を調査した。調査・分析を通じて、外地に住む人々にとっての日本古典芸能（文楽・義太夫）の意味を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外地においては、一九一〇年以降、盛んに能や文楽、歌舞伎など古典芸能の興行・巡業が行われていた。しかし、日本芸能史において、これら外地における伝統芸能の公演や内地人の娯楽としての芸能活動については、ほぼ扱われてこなかった。文楽などの古典芸能が外地を巡業という形で興行を行い、素義会も越境する形で活動が行われたことから、本研究は研究の軸を所謂外地に設定し、共時的な視点から外地における文楽（義太夫）の享受の諸相について明らかにすることで、日本に焦点を当てた従来の近代文楽史に、新たに重層的で多面的な記述を加えることが可能になったと考える。

研究成果の概要（英文）：This study examines aspects of the enjoyment of Bunraku (Gidayu) in colonial Korea, Taiwan, and Manchuria from the perspective of traditional performing arts performances in 'Gaichi' and performing arts activities as entertainment for Japanese audiences living in 'Gaichi', based on a survey of the actual state of classical performing arts performances, local Sogi-kai activities in 'Gaichi', newspapers and magazine articles published in 'Gaichi', and Bunraku- and theater-related magazine articles published in Japan. Through this analysis, I clarify the meaning that Bunraku (Gidayu) had for audiences living in 'Gaichi'.

研究分野：日本古典芸能

キーワード：近代在外日本人の芸能活動 文楽の海外公演 素義会の活動 植民地における日本古典芸能

1. 研究開始当初の背景

本研究は、植民地朝鮮・台湾・満州における文楽(義太夫)の享受について考察するものである。昭和期は、娯楽が多様化し、戦時下という状況であったため、文楽の人氣が衰えていた時期であったが、文楽の公演は植民地朝鮮・台湾・満州・中国において巡業の形で行われていた。

日本芸能史において、1945年以前の歌舞伎や文楽などの日本古典芸能の海外興行は、1928年に市川左團次一行が行ったロシアでの歌舞伎公演が唯一のものとされてきた。しかし、植民地朝鮮において主に1910年代から1940年代まで、文楽や歌舞伎興行が頻繁に行われていたことが、当時の新聞や演劇雑誌の記事から確認することができる。能や狂言の公演も、文楽や歌舞伎ほどの頻度ではないが行われていた。同時期には、朝鮮以外にも満州や台湾、中国でも日本伝統芸能の興行が催されていた。特に1930年代初頭から1940年初頭は、その後の70年間と比べても、古典芸能の海外興行がもっとも活発に実施された時期であったといえる。この時期は同時に、外地において素人による芸能活動も活発に行われていた。文楽愛好家の組織である「素義会」は、京城や朝鮮の地方都市だけでなく、満州地域まで含めた「満鮮素義会」としても活動を広範囲に繰り広げていた。日本内地における素義界とも交流があり、境界(国境)を超えた広範囲の内地人の文化活動であった。

しかし、日本古典芸能の海外における受容の実態、内地人の文化活動については、ほとんど明らかにされておらず、研究蓄積もきわめて乏しい。事実、興行年表には、満州や朝鮮、台湾での興行について断片的な記述が見られるにすぎない。特に昭和期は、海外での公演が盛んに行われ、古典芸能の興行の場が空間的に拡張された時期である。戦後、文楽の命脈を保つ上で重要な役割を果たしたと思われる。にもかかわらず、これまで意識されてこず、近代の芸能史に組み込まれることはなかった。これらの地域における古典芸能の興行やその受容を視野に入れてこそ、近代の芸能史が語れるのではないかというのが本研究の問いである。

2. 研究の目的

本研究に密接に関連する先行研究は、日本古典芸能の外地興行に関するものが主となっている。植民地朝鮮に関しては、特定の能興行についてのみの考察であり、満州に関しては、能や歌舞伎、文楽についても触れてはいるが、1935年という特定の年度に実施された興行のみであった。この期間の海外興行頻度から考えると、全体像は全く見えておらず、解明すべき点が多い。近年、植民地朝鮮・台湾・満州における文楽や歌舞伎興行についての研究が進められているが、全体像を把握するには至っていない。

また、文楽は巡業という形で外地興行を行い、素義会も越境(日本・朝鮮・満州)する形で活動が行われていたため、外地における伝統芸能の享受の研究は、地域を越える共時的な視点が必要であり、その点が本研究の独自性といえる。

本研究では、研究の軸を植民地朝鮮・台湾・満州に設定し、共時的な視点から文楽(義太夫)の享受について分析することで、近代文楽史を重層的で多面的なものにすることを目的とした。

3. 研究の方法

研究の対象となる時期は、日本の台湾統治が始まる1895年から1945年までとした。研究の具体的内容は以下のとおりである。

- 1) 植民地朝鮮・台湾・満州における文楽興行の実態(興行背景、日時・場所、演者、演目)
- 2) 「素義会」の組織(各素義会の会員など具体的な構成)と内地の素義会・文楽界との関係(ネットワーク)
- 3) 「素義会」の活動(稽古、日本からの公演への支援、素義大会開催など)などの具体的な実態以上について探り、外地における日本伝統芸能の受容の諸相を明らかにする。

研究の方法としては、以下の手順ですすめた。

1) 外地発行の新聞、雑誌記事の収集、分析をする。調査対象としては、<台湾日日新報>や<満州日日新報>、<大連新聞>、<京城日報><朝鮮新聞><釜山日報>などの日本人発行の新聞、および『台湾時報』『満州グラフ』『台湾公論』などの日本人発行の雑誌。

2) 文楽および演劇関連雑誌記事の収集、分析をする。文楽の外地公演関連記事、および素義関連記事を収集・分析する。調査対象としては、『文楽』や『浄瑠璃雑誌』、『浄瑠璃月報』、『太棹』、『演芸画報』、『郷土研究上方』など。

3) 外地(植民地)で日本人によって刊行された書籍、戦後の引揚者体験談の収集、分析をする。調査対象としては、『釜山港勢一斑』(1905)『京城繁昌記』(1915)『京城の面影』(1932)などの外地の都市情報が記された書籍など。

4. 研究成果

本研究は、植民地朝鮮・台湾・満州における文楽(義太夫)享受の諸相について外地における伝統芸能の公演や内地人の娯楽としての芸能活動という観点から考察したものである。外地においては、1910年以降、盛んに能や文楽、歌舞伎など古典芸能の興行・巡業が行われていた。しかし、日本芸能史において、これら外地における伝統芸能の公演や内地人の娯楽としての芸能活動については、ほぼ扱われてこなかった。新しい娯楽の登場や戦時下ということから伝統芸能の人氣は衰えたが、外地においては必ずしもそうではなかった。したがって、本研究では、興行の実態や内地人の素義会、素人歌舞伎の活動を具体的に調査しその全体像を明らかにし、外地に住む人々にとっての古典芸能(文楽・義太夫)の意味を探ることを目的とした。

資料としては、外地で発行された新聞、雑誌記事、国内で刊行された文楽および演劇関連雑誌記事、また、外地(植民地)で日本人によって刊行された書籍を収集し調査を行った。収集した資料を考察し、2021年12月18日、韓国日語日文学会(オンライン開催)にて、「植民地朝鮮と浄瑠璃」という題で研究発表をし、執筆した論文は「植民地朝鮮における素人義太夫の活動」という題で『青山語文』53号(2023年3月)に掲載された。また、植民地台湾に関して調査した内容をもとに、2022年8月29日に開催された「2022AFC(アジア未来会議)」国際学会(於台湾中国文化大学)にて、「植民地朝鮮・台湾滞在日本人と日本古典芸能」という題で行った発表報告を行った。

そのほか、2024年刊行予定である『歌舞伎の東西 絵と文化』(仮)に掲載される論文を「近代の朝鮮半島・台湾・満洲における浄瑠璃に関する出版物」という題で執筆した。

文楽などの古典芸能が外地を巡業という形で興行を行い、素義会も越境する形で活動が行われたことから、本研究は研究の軸を所謂外地に設定し、共時的な視点から外地における文楽(義太夫)の享受の諸相について明らかにすることで、日本に焦点を当てた従来の近代文楽史に、新たに重層的で多面的な記述を加えることが可能になったと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 韓京子	4. 巻 53
2. 論文標題 植民地朝鮮における素人義太夫の活動	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 青山語文	6. 最初と最後の頁 77-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 韓京子
2. 発表標題 植民地朝鮮・台湾滞在日本人と日本古典芸能
3. 学会等名 2022AFC（アジア未来会議）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 韓京子
2. 発表標題 「植民地朝鮮と浄瑠璃」
3. 学会等名 韓国日語日文学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------